2022年度活動概要

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会は、言語研究・言語理論の英語教育へ応用をテーマに、機能主義言語学研究会との合同研究例会（Zoom による開催）を中心に活動した。大学レベルの英語教育で扱う言語現象に関して、本研究会会員の今井隆夫は認知言語学の視点から、長峯貴幸は ELF 音声学の視点から、北尾泰幸は生成文法理論の視点から、都築雅子と高橋直子は語彙意味論とコーパス言語学の視点から、奉鉉京は第二言語習得論の視点から、そして大森裕實は歴史言語学と機能主義言語学の視点から新たな切り口を攻究した。

特に、令和 4 年度（2022 年度）は、第 61 回国際大会《SIG Presentations》において、1. Explanatory Grammar from Historical Viewpoints（大森裕實）及び 2. Image-Based Grammar from Cognitive Linguistic Viewpoints（今井隆夫）というトピックで研究発表を行なった――本発表では、できるだけ質疑応答形式を採りながら、本研究会活動の中核的言語観に基づく「応用英語文法」とは何かについて考究した。第 1 トピックでは、歴史言語学及び英語史的観点から、《言語知識》の定義を明確化したうえで「説明文法」とは何かについて具体的事例を挙げて説明した――①規範文法（Prescriptive Grammar）の成立事情⇒学校文法の呪縛からの脱却（二重否定の忌避／二人称主語と動詞の Concord／比較構文における接続詞としての than）；②文法化（Grammaticalization）と(間)主観化（Intersubjectivity）（存在構文の There／法助動詞／接続詞の文法化⇒談話標識 Discourse Marker の(間)主観化としての because；③英語史の知識と語形成（派生接辞 –ness と –ity の問題）など。第 2 トピックでは、認知言語学的観点から、「イメージ文法」とは何かについて具体的事例を挙げて説明した――①日本語にはなく英語にはあるものとして、「可算/不可算」を常に区別することと英語では主語を表示することが基本であるのに対し、日本語の場合、主語は表示しないのが基本であることを、神の視点/虫の視点と person focus/situation focus の概念を参照して説述；②日英語の表現の違いと関連して、翻訳研究における Domestication/Foreignization の概念を英語学習に活用することを、認知言語学の道具立てである精緻度の違いと絡めて説述；③英語では “You scared me.” のように事態を起こる順に表現するが、日本人英語学習者の英語では “I was scared.” のように受け身を使う傾向があることを認知図式で考察；④日英語の事態に対するカテゴリー化の違いという観点から “I think” と「思う」の違いを考察。

本研究会は第 53 回国際大会（2014）-から第 58 回国際大会（2019）まで連続してシンポジウムを実施し、第 60 回国際大会（2021）及び第 61 回国際大会（2022）では研究会の活動内容を慫慂発表することにより、多くの方々と意見交換する機会を設けて、活動の環を広げてきました。今後も継続して研究テーマを攻究していきたいと考えています。